



大正期の外観を再現する新駅舎のイメージ図＝北九州市提供

新折尾駅、大正の姿

地元意向受け決定

日本最古の立体交差駅、JR九州の折尾駅（北九州市八幡西区）の建て替えに伴う新駅舎デザイン案が決まった。大正期の外観を再現し、シンボルの部材も活用する。

待合室の円形ベンチ残る

文化財価値「調査は不要」

年内にも解体されるJR折尾駅について、地元の市民団体が文化財的価値の調査などを求めた陳情の審査が23日、市議会建築消防委員会であった。陳情した「学園&地域交流ネットワーク」と「折尾文化会議」は「国の重要文化財になり得るかもしれない」などと訴えたが、市側は現駅舎の部材を生かした新駅舎の整備方針を決めており調査はしない考えだ。

市は新駅舎整備にあたり、地元自治会などでつくる協議会の提言を基に、大正時代の化粧

市民団体陳情に市側答弁

柱や待合円形ベンチなどの部材を生かす方針を09年にまとめた。これまで現駅舎の文化財としての価値を調べたことはない。

市民団体側は陳情書で「土木学会も文化財の価値があると評価している」などと主張。市側は「新駅舎の整備方針は市民の要望を踏まえたもの。新駅舎は現駅舎の部材を活用するので価値を調べる必要はない」などの考えを示した。陳情は継続審査となった。

（桑原紀彦）

折尾駅は1891（明治24）年に開業した。1916（大正5）年に駅舎が建て替えられ、80年代の改修で現在の姿になった。現駅舎は年内にも取り壊され、現在は近くの仮駅舎が使われている。

新駅舎について、地元の

自治会役員や工商业者らでつくる「おりお未来21協議会」が今年2月、市に大正期の外観を再現するように要望。地元の意向を受けて、市がJR九州と協議を続けていた。

新駅舎には、現在使われている待合室の円形ベンチ

など、レトロな雰囲気を感じさせる部材を活用。市折尾総合整備事務所は「可能な限り現在のシンボルを再利用したい」と話している。

新駅舎は2016年度の完成が予定されている。

（菊池文隆）